ＦＤ

プログラム番号　2601A

New!!

学生の学習意欲を促進する授業設計

■講師

川瀬　和也（徳島大学・総合教育センター・助教）

東京大学文学部卒業、同大学院人文社会系研究科博士課程哲学専門分野を単位取得満期退学。在学中に、「東京大学フューチャー・ファカルティ・プログラム（東大 FFP）」を1期生として履修し、高等教育機関における教育方法とファカルティ・ディベロップメントの基礎を学ぶ。東京大学・大学総合教育センターにて特任研究員として東大 FFP の運営や、MOOC 講座「インタラクティブ・ティーチング」の開発に携わる。2014 年 11 月より現職。全学 FD の運営を通じて、徳島大学における教育の改善に取り組んでいる。

■プログラム概要

学生の学習意欲を引き出すために、皆さんはどんな工夫をされていますか。学生の学習意欲は、学習成果に直結します。また、アクティブ・ラーニング型授業への参加や、自宅での学修を促すためにも、学生の学習意欲を高めることは不可欠です。この学習意欲に、授業を通して、教員からはどのような働きかけができるのでしょうか。また、どのような指針をもって、授業を設計すればよいのでしょうか。

このプログラムでは、「動機付け」に関する様々な理論の中で、「授業を通じて学習意欲を高める」という目的のために最も参照しやすい理論として、「価値」と「予期」に基づく動機づけの理論を紹介します。また、それを踏まえて、実際に受講者の皆さん自身の授業を改善するための工夫について考えます。受講者の皆さんには、実践や悩みを共有し、学び続けるためのネットワークを構築していただくために、グループワークへの積極的な参加を期待しています。

■主な受講対象

・学生の学習意欲を引き出す授業に取り組んでいる／取り組みたいと考えている教員
・アクティブ・ラーニングや自宅学習への取り組みを促したい教員
・他の教員と授業実践における工夫や悩みを共有したい教員
・理論に裏付けられた教育実践に取り組みたい教員

■本プログラムの到達目標

1. 学生の学習意欲を高める方策について、「価値」と「期待」という言葉を用いて説明できる。
2. 自身の授業に取り入れたい、学生の学習意欲を高めるための工夫を説明できる。
3. 学習科学の知見を授業改善に役立てるためのコツを説明できる。
4. ワークショップ終了後も学び続けるためのネットワークを作ることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）10:00～12:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2601Ｂ

研究支援職員としての基礎知識
－ゼロから始める研究者との協働－

■講師

宮内　卓也(国立大学法人高知大学・法人企画課・法人企画係長)

平成 15 年　高知大学就職　総務部総務課　法規担当
(平成 17 年 3 月まで)
平成 17 年　文部科学省研究振興局学術研究助成課研修生
(平成 18 年 3 月まで)
平成 18 年　高知大学研究協力部地域連携課　知的財産担当
(平成 23 年 7 月まで)
平成 23 年　高知大学研究協力部研究協力課　科研費担当
(平成 24 年 7 月まで)
平成 24 年　高知大学法人企画課　教育組織改革(学部改組等)担当
平成 27 年　高知大学法人企画課　法人企画係長(現在に至る)

■プログラム概要

「研究支援」というと、「産学連携・知的財産」や「科研費」のように、「専門的」「複雑」との理由で敬遠されがちな分野です。しかし、大学は教育機関であると同時に「研究機関」であり、教員は「研究者」の側面も併せもっています。また、大学における研究費の多くは「競争的資金」であり、学生の「研究成果」である学位論文など、「研究系」以外の職員も様々な場面で「研究」に関わることになります。加えて、近年の科学技術政策を見ると、研究機関が「研究者を研究に専念させることができる体制」を構築するための施策が展開され、そこでは職員が果すべき役割も大きくなってきています。

そこで、本プログラムでは、先ず第2期科学技術基本計画(H13)以降の科学技術政策を概観します。その上で、ケースを用いて「競争的資金」などの基礎的な知識・制度に触れながら、グループワークを通して「研究機関(大学)における職員の役割」を考えます。

■主な受講対象

研究系(研究協力・産学連携・知的財産など)業務未経験者又は経験1年未満の者

■本プログラムの到達目標

1. 第2期科学技術基本計画(平成13年制定)以降の科学技術政策の概要を説明できる。
2. 研究機関(大学)における職員の役割について説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日(水)10:00～12:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2601C

社会連携系職員養成プログラムレベルⅠ「地域特性論」
ー地方創生・地域資源を活用した地域の活性化ー

■講師

坂本　世津夫
（愛媛大学　社会連携推進機構　教授（地域連携コーディネーター））

2002 年 4 月から 2005 年 3 月まで、愛媛大学にて「地域情報学」（伊予銀行寄附部門）を担当。2005 年 4 月から 2011 年 3 月まで、高知大学国際・地域連携センター教授（生涯学習部門長）。2014 年 10 月から愛媛大学社会連携推進機構教授（地域連携コーディネーター）。日本の情報化を、地域という視点で見直し、地域における「知的能力」と「コミュニケーション能力」を高めることにより、新たな産業集積や地域の活性化（地域の自立）が実現できないか、研究・実践している（ICT　利活用促進）。総務省委嘱地域情報化アドバイザー、一般社団法人日本テレワーク協会アドバイザー、地域活性化伝道師（内閣官房）、マイルドさ国党（党首）等。

■プログラム概要

急速な人口減少、超高齢化社会、従来型産業の衰退と、現在の日本は（日本の地域社会は）大きな転換点にさしかかっている。それを打開させる為に、「地方創生」が叫ばれているが（国では、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会を創生できるよう、まち・ひと・しごと創生本部を設置している。そして大学には、自治体との連携を強化して打開策に取り組み、地域課題に対応できるように大学改革が求められている）、具体的にどう対応すれば良いのか、国も自治体も大学も打開策を見いだせていない状況にある。今回の講義では、地方創生の意味を理解して、地域が本来持っている資源を如何に活用して地方創生を図るか、教職員は如何にアクションすれば良いのかについて講義を行う。地方創生、地域資源を活用した地域の活性化手法のヒントになればと考えている。

■主な受講対象

教職員：大学を「地（知）の拠点」とするために活動している多くの教職員の参加を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 地方創生の意味が理解できる。
2. 地域資源の活用方法を提案できる（地域イノベーションの提案）。
3. 地方創生における大学の意義・方向性を理解する（COCの意義）。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

※本プログラムは，「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」と連携し，
愛媛大学，香川大学，四国大学，今治明徳短期大学による共同プログラムとして
開講いたします。

ＦＤ

プログラム番号　2601D

New!!

学生の学びやすさと学習意欲を高める授業設計
ー課題分析図の活用ー

■講師

仲道　雅輝
（愛媛大学　総合情報メディアセンター教育デザイン室長兼教育・学生支援機構　教育企画室・講師）

1995 年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009 年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了（専門：教授システム学）。1995 年より日本福祉大学事務職員、2011 年から愛媛大学にて FD・SD や学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

学生の学びやすさと学習意欲を高めるために、いくつかの ID（インストラクショナル・デザイン）理論を用いて授業設計の手法を学びます。学習意欲は、学びやすさによって維持・促進され、動機づけによって高めることができます。学びやすさや意欲を設計するためには、教員が自身の教授内容を明確にし、学生目線で再構築する作業が必要です。その第一段階として、学生に対して「この授業で何ができるようになればよいのか」が具体的に伝わる学習目標を提示します。次に、教員の頭にある既に構成された教授内容を一旦分解します。これを課題分析といい、分解した学習要素をより学びやすく、意欲の向上に効果的な学習順序になるよう再構築します。本プログラムでは、課題分析のワークを通して、これからの授業改善に役立つヒントを持ち帰っていただきます。

■主な受講対象

教員。主に授業構成や学習順序を見直したい方、もしくは授業設計に関心のある方。

■本プログラムの到達目標

1. 学習目標を行動目標として明確に表現できる。
2. 課題分析の考え方を説明できる。
3. 自身の教授内容の課題分析図が作成できる。
4. 課題分析図の結果をもとに、授業内容の改善案を立てることができる。

■準備物

自身の授業シラバスをご持参ください。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2601E

大人数講義法の基本

■講師

小林　直人
（愛媛大学　学長特別補佐、教育・学生支援機構　教育企画室長、
愛媛大学　医学部　総合医学教育センター長・教授）

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年東京大学にて博士（医学）の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部教授、平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任。平成 27 年度より学長特別補佐。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

「よい」講義とはここでは、聞き手の学生にとって分かりやすく、知的な緊張感があり、さらに学生が参加する（した気にさせる）講義、ということにします。大人数での講義にはデメリットも多いのが事実ですが、現在の高等教育の実情を考えればこのような授業形態を避けることも不可能です。大講義室でも学生とコミュニケーションを取る方法、学生を積極的に講義に参加させる方法や授業効果を高める方法など、大人数の学生を聴衆とした「よい」講義をするために気をつけておかなければならない様々な授業スキルを、実例や実習を通して習得することができます。

また昨今の高等教育に強く求められている参加体験型授業/アクティブ・ラーニング型授業の一例として、受講者に実際にグループワークを体験していただきます。講義を受け持つようになって間もない教員の方はもちろん、自分の講義を振り返りたいと思われている方、また職員の方々も是非受講してください。

この研修では、参加者の皆さんが日頃実践している工夫も披露して頂きます。ご自分の経験（失敗談も歓迎です！）や他で見聞きした実践例を共有しましょう。きっと、明日の授業に役立つヒントが見つかります。

■主な受講対象

まだ講義経験がないか数年未満の講義経験しかない教員の方を歓迎します。また、学務系の職員の方にとっては、大学の講義に今求められていることについて考えるよい機会になると思います。

■本プログラムの到達目標

1. 学生にとってよい授業とはどのようなものかを具体的に説明できる。
2. 自分の経験に基づいて、大人数講義のメリットとデメリットを列挙することができる。
3. 「学生中心の大学」の実現のためによい授業ができるようになる。
4. 大講義室ならではと言える様々な授業スキルを、実際の体験を通して習得し自分の授業に生かすことができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2601F

教学 IR におけるリサーチ・クエスチョンの作り方：教育改善の実現に向けて

■講師

川那部　隆司（立命館大学・教育開発推進機構・准教授）

2006 年 3 月立命館大学文学部心理学専攻卒業、2007 年 11 月ランカスター大学大学院修了（Master of Science）、2011 年 3 月立命館大学大学院修了（博士（文学）取得）。2011 年 4 月立命館大学教育開発推進機構に講師として着任、教学 IR プロジェクトとして各種調査の設計・実施、およびデータの分析・報告を担当。2013 年 4 月より同准教授。教学 IR によるデータに基づく教育改善の具体的な活動として、初年次教育、接続教育等を含む学習支援に関わる学部支援、プログラム等の開発・実施を担当。

■プログラム概要

日本の多くの大学で、IR（インスティチューショナル・リサーチ）活動が急速に進められています。しかし、現状では「どんなデータをとれば良いのかがわからない」「どんな分析が必要かわからない」「IR 活動が実際の改善につながらない」といった声が頻繁に聞こえてきます。

この一因には、リサーチ・クエスチョン（以下 RQ、ここでは「リサーチのための問い」とします）が明確でないことが挙げられます。RQ が曖昧な場合、何を明らかにしたいかが曖昧なので、当然集めるべきデータ、行うべき分析がわかりづらくなります。そうなると、実際の改善にもなかなか結びつきません。

本プログラムでは、まず教学 IR の概要と国内外の現状について解説します。その後、良い RQ とはどのようなものかを具体例を挙げながら紹介した上で、グループに分かれて、実際に RQ を作る体験をしていただきます。RQ を作るプロセスを身につけていただくことで、実際の教育改善につながる IR 活動が実践できるようになります。

■主な受講対象

教職員。特に、教学分野の IR に携わっておられる方だけでなく、大学全体あるいは学部レベルのデータに基づく教育改善に興味をお持ちの方であれば、IR の取り組み経験が少ない方でも歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. IR におけるリサーチ・クエスチョンの重要性を説明できる。
2. 良いリサーチ・クエスチョンとはどのようなものかを説明できる。
3. 実際の改善につながる IR 活動を進めるための、リサーチ・クエスチョンを作ることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2602A

理系講義形式授業において
学生の学習を促進する授業デザイン

■講師

榊原　暢久
（芝浦工業大学　教育イノベーション推進センター／工学部　教授）
北海道教育大学（札幌校）小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士（理学）。 旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師を経て、2007 年度より芝浦工業大学工学部准教授。2009 年 4 月より現職。ファカルティ・ディベロッパー。日本高等教育開発協会、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発（特に、理工系数学基礎教育や教員支援（FD）プログラム）。

吉田　博
（徳島大学　総合教育センター　講師）
愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009 年度から徳島大学で全学 FD プログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）の FD 担当として、SPOD-FD プログラムの企画立案、調査研究に携わる。

■プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びや授業外学習を促進することに繋がるひと工夫を取り扱います。はじめに、授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、その目標到達を測定する評価方法について考えます。続いて、具体的な授業の方法や課題について考えていきます。プログラムは講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

■主な受講対象

・自身の理工系の講義形式授業の中で実施できる、広い意味でのアクティブラーニングの手法を知りたい教員
・自身の理工系の講義形式授業の中で行っているアクティブラーニングの取り組みを他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員
・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員

■本プログラムの到達目標

1. 理工系基礎科目における講義形式授業の基礎的なデザイン方法を修得することができる。
2. 理工系基礎科目における自身の講義形式授業をふり返り、成果や課題、改善すべき点を明らかにすることができる。
3. 理工系基礎科目における講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

New!!

プログラム番号　2602B

若手職員へ贈るチームワーク入門
～「目の前の仕事をこなす」からのステップアップ～

■講師

《SPOD次世代リーダー養成ゼミナール第5期生》

愛媛大学　総務部経営企画課評価調査チーム	チームリーダー	渡邉　友樹
香川大学　経営管理室企画グループ	チーフ	後藤　雅美
高知大学　学務部学務課修学支援室教育学部教務係	主任	吉岡　瞳
高知工科大学　総務部総務企画課	主任	藤波　将司
徳島大学　国際課国際交流係	主任	江上　真人
四国大学　総務・企画部経理課	主査	山根　文彦
徳島文理大学　総務部庶務・渉外グループ	事務主任	藤巻　晃
聖カタリナ大学　入試課	係長	宮﨑　和典
松山大学　経営企画部経営企画課	課員	平野　利幸
弓削商船高等専門学校　総務課総務・人事グループ	人事主任	羽藤　菜紗

■プログラム概要

業務にも慣れ，自分自身の仕事にも自信が持てるようになってきた若手職員の皆さんが，仲間とともにそれぞれの個の能力をチームの一員として発揮するための方法について学ぶチームワーク入門プログラムです。

個人に与えられた業務を効率よくこなすことは大事なことです。しかし，それぞれの職場で行われている業務は，掲げられた目的や目標に向かって行われており，多くの人々の協力があって成り立っています。そのために，そこでは，それぞれの能力が存分に発揮できるよう互いをよく知ることや円滑に業務が進むよう仲間との良好な関係を築くことが大事になってきます。

そこで，本プログラムでは，グループワーク等を通じ，チームとして働くために自身がとるべき行動についてのヒントを持ち帰っていただきます。

まず，グループのメンバーのことをよく知るために，自己理解・他者理解を深めることができるワークを体験していただきます。そこでは，傾聴することについても学んでいただきます。そして，チームワークに関する講義の後，良いチームを作るための知識や自己理解・他者理解のワークで把握したそれぞれの強み・弱みを活かしながら，グループ全員で協力するワークに取り組んでいただきます。このワークで自分自身がとった行動，メンバーがとった行動を振り返ることで，各参加者が職場で活かすことのできるヒントを得ていただきます。

■主な受講対象

採用1～4年程度で30歳未満の若手職員。特に，チームで働きたいと思っている方，もしくは，所属部局等においてワーキンググループ等に関わり始めた方。

■本プログラムの到達目標

1．自己理解，他者理解を深めるために傾聴することができる。
2．チームワークの重要性を説明することができる。
3．仲間との良好な関係を築くために、自分自身やメンバーのとった行動を振り返ることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～17：30
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2602C

New!!

学生のキャリア形成支援

■講師

岡　靖子（愛媛大学 教育学生支援部 就職支援課 課長）

愛媛大学大学院法文学研究科総合法政策専攻修了。九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻博士後期課程在籍。食品メーカー研究室勤務を経て 1990 年より教育研修会社に所属し社員研修に従事。2004 年よりキャリアカウンセラーとして、大学、行政機関においてキャリアガイダンス，キャリアカウンセリング，メール相談事業などを担当。2011 年より愛媛大学教育・学生支援機構学生支援センターにて研究員としてキャリア教育・キャリア支援を担当し，2015 年 4 月より現職。

■プログラム概要

大学におけるキャリア支援について各方面から関心が高まっています。キャリア支援における大学職員の役割とはどのようなものでしょうか。

大学で実施するキャリア支援の多くは就職先を見つけるまでの支援です。その後の学生がどのような経験によりやりがいを感じ，何がつまずきになるのかについて知る機会はほとんどありません。また，学生は個別に能力や価値観に違いがあり，支援において唯一の正解はありません。学生の状況を踏まえ支援のタイミングや方法を判断して関わることが重要になってきます。

本講座は、学生が経験する初期キャリアについてキャリアシュミレーションゲームにより擬似的に体験し，受講者同士のディスカッションから，大学におけるキャリア形成支援のヒントが見つかることを期待するプログラムです。

キャリア支援に関する知識や経験がない方，職員歴の短い方にも参加しやすいプログラムですので、是非ご参加ください。

■主な受講対象

学生へのキャリア支援に関心のある職員の方。就職支援やキャリア支援の経験のない方にも参加いただける内容です。

■本プログラムの到達目標

1. 学生へのキャリア形成支援とはどのようなものか説明できる。
2. 学生のキャリア形成支援における自分の役割が理解できる。
3. 今後の学生への支援に反映できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2602D

New!!

相互理解を通じたチーム力向上
－自己理解・他者理解に役立つ視点の提供－

■講師

杉本　洋一（香川大学キャリア支援センター　副センター長・客員教授）

平成 22 年 3 月、企業から香川大学に出向し、現在に至る。
出向元企業では、全般管理・人事労務・社員教育に関する業務に携わってきた。また、四国経営品質協議会の設立・運営に関わった。
大学では、キャリア教育の授業のほか、地域貢献人財育成講座の各授業を担当している。

特定非営利活動法人日本キャリア開発協会認定CDA
一般社団法人日本MBTI協会認定MBTI認定ユーザー

■プログラム概要

本プログラムは、性格心理学のメソッドの１つを題材にして、その概要を紹介することで、認知スタイルの違いが建設的な相補関係づくりに役立つことを理解していただきます。講義と演習を織り交ぜた内容にします。なお、本プログラムは、私の担当授業を、SPOD用に改編したものです。

■主な受講対象

・自己理解のフレームワークを得ることで、さらに自己理解と他者理解を深めたい方
・認知スタイルの多様性が相補的協働の促進に役立つという考え方を知りたい方

■本プログラムの到達目標

1. 類型論に基づく認知スタイルのフレームワークを理解できる。
2. 自己理解を通じて、他者理解を深めることができる。
3. 建設的な協働関係を促進するための知識と視点を持つことができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2602E

New!!

教育改善のための IR 活用

■講師

中井　俊樹（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　教授）

専門は大学教育論、人材育成論。1998 年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007 年に准教授、2015 年より現職。著書に、『大学の教員免許業務 Q&A』（共編著）、『看護現場で使える教育学の理論と技法』（編著）、『大学の IR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員のための教室英語表現 300』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『アジア・オセアニアの高等教育』（分担執筆）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。

清水　栄子（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　講師）

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教を経て、2015 年 4 月より現職。著書に『アカデミック・アドバイジング：その専門性と実践－日本の大学へのアメリカの示唆－』（単著）がある。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

IR（インスティチューショナル・リサーチ）は、学内外の多様なデータを用いて計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する活動です。情報を提供するという行為は、単にデータを提供するのとは異なります。大学にはさまざまなデータがありますが、多くのデータはある事実を表した無機質なものにすぎません。データから意味のある情報へと変換することが、IR の業務の本質であり醍醐味と言えます。

データを意味のある情報に変換するには、そのデータがどのような意味を持っているのか、他のデータとどのような関係があるのかなど、問題意識を持って仮説を立てたり解釈したりすることが必要です。また、データを加工して意味のある情報に変換するためには、各種分析手法も重要になります。

本セッションでは、教育改善のための IR 活用の実践事例を通して、各大学の教育改善の場面で活用できる IR の基本的な知識と技能を身につけることを目指します。

■主な受講対象

IR の実践に関心のある教員・職員

■本プログラムの到達目標

1. IR の実践の標準的なプロセスと課題を自分の言葉で説明できる。
2. 教育改善のための IR 活用の実践事例を通して、IR の実践の工夫を説明できる。
3. R の知識と技能を所属大学の教育改善の具体的事例に適用することができる。
4. IR に関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気に貢献することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～17：30

会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2602F

国際連携系職員養成プログラムレベルⅠ①
「外国人受入入門」 －留学生の受入　A to Z －

■講師

塩川　雅美（摂南大学　学長室　大学改革アドバイザー）

大学卒業後、OA 機器メーカーでインストラクターとして 3 年半勤務。1988 年に学校法人谷岡学園神戸芸術工科大学に就職し、大学業界に入る。神戸芸術工科大学では、国際交流と広報を担当（最後の役職名は、広報・国際交流課長）。職務と並行し、1995 年に神戸大学大学院国際協力研究科博士前期課程に社会人入学（1997 年修了）。再び 2000 年に同研究科博士後期課程に編入学し、2005 年に博士（学術）の学位取得。京都工芸繊維大学国際交流センター（助教授）、関西国際大学（国際交流センター次長）を経て、2010 年より学校法人常翔学園に勤務。総務部国際交流コーディネーターを経て 2015 年 4 月より現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。JAFSA 常務理事（2002 年～2006 年）。JAFSA『留学生受入れの手引き（初版）』及び『～増補改訂版～』プロジェクト代表等。

■プログラム概要

文部科学省による「留学生受入れ30万人計画」はもとより、国内学生の海外派遣数増加推進の方針に応じるためにも留学生の受け入れ推進は多くの大学にとって、避けては通れない課題になりつつあります。しかしながら、留学生受入れ業務は、経費と人手がかかるために、大学内の業務の中でも「後回し」になりがちであることも否めない事実です。今回の研修は、「国際連携系職員養成プログラム」の「レベル1」として、「留学生受入れ業務」の A to Z について説明しながらも、「留学生受入れ業務」全体を俯瞰しますので、初心者ではない方も、今一度、業務を見直していただくきっかけになることでしょう。少ない担当者数、少ない予算でも、実践できる「留学生受入れ業務」の事例も紹介します。

■主な受講対象

大学等で海外からの留学生の受入業務に携わっている方。教員、職員を問いません。初心者及び経験年数が短い方はもちろんですが、中小大学等での事例も紹介しますので、経験年数の長い方でも、「おさらい」のために参加くださっても受入業務全体を俯瞰することによって、新たな発見や、業務改善のヒントになります。

■本プログラムの到達目標

1. 外国人の受入手続きができる。
2. 外国人に渡日前の手続きについて説明することができる。
3. 外国人に渡日時の手続きについて説明することができる。
4. 外国人の就学・就労等に関する支援ができる。
5. 日本の生活・安全に関して説明することができる。
6. 外国人に帰国時の手続きについて説明することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2603A

ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方

■講師

村田　晋也
（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師）

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成 26 年 9 月より現職。現本務校において FD 活動に加え、学生の能力開発（「愛媛大学リーダーズ・スクール」の運営）に携わる。文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム」事業推進責任者。専門は組織論、人的資源管理論、リーダーシップ論。

■プログラム概要

社会心理学者 K. レヴィンをはじめとした集団力学を専門とする研究者たちによってこれまで種々実証されてきたように、グループワークは、受講者が学習に対する積極的な姿勢を抱けるよう変化を促すのに有効な手法として注目されてきました。とりわけ同手法は近年、学校教育の場で広く導入されつつあることは周知のとおりです。しかし、一言で「グループワーク」とはいっても、その実践方法は玉石混淆であるのが実態です。

そこで本講では、それら数ある手法のうち、高い効果が得られるとして良く知られているやり方の１つを体験して頂ければと考えております。これは、社会心理学者 E. アロンソンが 1978 年著書 The Jigsaw Classroom（松山安雄訳『ジグソー学級 生徒と教師の心を開く協同学習法の教え方と学び方』）の中で提唱した「ジグソー学習法」なるもので、この学習法を用いた授業の進め方とその効果を皆さまに紹介することを本セミナーの主たる目的としております。

■主な受講対象

今後、グループワーク手法を取り入れた授業を行うことを検討されておられる教職員の皆さまを歓迎致します。

■本プログラムの到達目標

1. ジグソー学習法の基本的な仕組みについて説明できる。
2. ジグソー学習法を用いたグループワークの進め方を体得し、授業で用いることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）15：30～17：30
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2603C

New!!

ケースで学ぶ大学リーダーシップ

■講師

中島 英博
（名古屋大学 高等教育研究センター 准教授）

名古屋大学大学院経済学研究科博士課程後期課程修了，博士（経済学）。三重大学高等教育創造開発センター助教授，名城大学大学院大学・学校づくり研究科准教授などを経て現職。名古屋大学大学院教育発達科学研究科高度専門職業人養成コースを兼担し，高等教育マネジメント分野で高等教育経営論（大学組織論）などを担当。

■プログラム概要

大学の中で，構成員に対して影響力を及ぼすにはどのような方法があるのでしょうか。また，学長の権限強化は，大学改革を促進するのでしょうか。このプログラムでは，高等教育マネジメントの領域で標準的なリーダーシップ理論を学ぶと共に，事例の中で理論の実践的な活用を議論するケースメソッドアプローチにより，職場での活用につながる視点と経験を提供します。具体的な進め方は，次の通りです。まず，特性論，行動論，条件適合論，交換関係論，変革的リーダーシップ論という重要なパラダイムの特徴を学び，これらを踏まえてある学部長の経験談を他の参加者と共に分析し，この学部長に望ましいリーダーシップのあり方を提案してもらいます。最後に，参加者の職場の具体的な課題をリーダーシップ理論の枠組みで説明してもらい，参加者同士で批判的に検討します。

■主な受講対象

大学・短大の教職員，特に経験年数が 8 年以上の中堅教職員の方を歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1．複数のリーダーシップ理論の特徴を説明できる。
2．理論を具体的な大学組織の場面に適用して説明できる。
3．職場の課題を理論の枠組みを用いて分析できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）15：30～17：30
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2603D

事例報告「学習成果の可視化にむけて」

■講師

小西　敏雄（松山東雲女子大学　人文科学部　教授）
広島大学理学部数学科卒業。愛媛大学大学院理学研究科数学専攻修了。2001 年 4 月より松山東雲女子大学教授。現在、女子大学教務部長と情報メディアセンター長を兼任する。専門分野はパターン認知、統計解析、情報処理教育。

坪井　泰士（阿南工業高等専門学校　創造技術工学科一般教養　　教授）
広島大学教育学部卒業。専攻，教育工学，教育実践，FD。国立高専機構研修および SPOD 派遣プログラム講師。

平尾　智隆（愛媛大学　教育・学生支援機構　准教授）
専攻は教育経済学。2005 年より，愛媛大学教育・学生支援機構講師。2015 年 4 月より現職。愛媛大学では主にキャリア教育の授業を担当。主な業績：『教育効果の実証―キャリア形成における有効性』日本評論社，2013 年（編著）。

司会：小林　直人（愛媛大学学長特別補佐／教育・学生支援機構教育企画室長　教授）

■プログラム概要

本プログラムは，学習成果の可視化に関する設置者形態の異なる各機関の取組事例を，3名の講師からご報告いただきます。その後報告を踏まえた意見交換を予定しております。以下，各講師から報告いただく概要です。

（松山東雲女子大学　小西　敏雄）
2010 年度入学生から教員免許取得に教職カルテ作成が義務化され、本学の教職関係教員から依頼でエクセルで教職カルテの入力フォームを作成した。PC 教室に該当学生を集め、入力フォームを USB メモリへ保存させ、年度末ごとに履修科目の振り返りの入力等をさせたが、USB メモリの紛失や破壊などの事故が起こった。教職カルテの効率的な管理を模索し、自力でのサーバ立ち上げを検討したが、2014 年度に文部科学省『私立大学等教育研究活性化設備整備事業』に e ポートフォリオシステム等を補助金申請したところ採択され、2015 年度からの学習成果の可視化が可能になった。今回の発表は、2015 年度に入ってからの進捗状況を報告したい。

（阿南工業高等専門学校　坪井　泰士）
「主体性をもって多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく」アクティブ･ラーニングは，高等教育においても命題となっています。ところが，アクティブ･ラーニングにおいては，学習成果の可視化は簡単ではありません。「LMS（Learning Management System）ベースの反転授業によるアクティブ・ラーニング」における学習成果可視化の取組を報告します。
1．アクティブ・ラーニングって？　2．反転授業って？　3．反転授業用講義ビデオのお手軽製作法
4．反転授業 AL で，これが困る！　5．ここで，LMS の出番

（愛媛大学　平尾　智隆）
本報告では，愛媛大学で開講されている初年次必修のキャリア教育科目「社会力入門」の授業について紹介するとともに，「社会力入門」で導入されている学修ポートフォリオ（キャリアポートフォリオ）について紹介をおこなう。学修ポートフォリオは，学生が大学での学びや体験をどのように捉えているか，自身の体験を振り返り，自己成長につなげることを意図した教材・取り組みで，「社会力入門」はソーシャル・スキルの育成を企図した科目である。「学習成果の可視化」を行うこと意味と効果について，また限界についても議論したい。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）15：30～17：30
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2603F

New!!

国際連携系職員養成プログラムレベルⅠ②
「海外派遣入門」

■講師

塩川　雅美（摂南大学　学長室　大学改革アドバイザー）

大学卒業後、OA 機器メーカーでインストラクターとして 3 年半勤務。1988 年に学校法人谷岡学園神戸芸術工科大学に就職し、大学業界に入る。神戸芸術工科大学では、国際交流と広報を担当（最後の役職名は、広報・国際交流課長）。職務と並行し、1995 年に神戸大学大学院国際協力研究科博士前期課程に社会人入学（1997 年修了）。再び 2000 年に同研究科博士後期課程に編入学し、2005 年に博士（学術）の学位取得。京都工芸繊維大学国際交流センター（助教授）、関西国際大学（国際交流センター次長）を経て、2010 年より学校法人常翔学園に勤務。総務部国際交流コーディネーターを経て 2015 年 4 月より現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC。JAFSA 常務理事（2002 年～2006 年）。

■プログラム概要

「日本人学生の内向き志向」が取り上げられ、海外留学などの海外経験に対して、現在の学生は消極的であると言われています。しかし、次代を担う学生たちが国内にとどまるのみでは、地球的規模のグローバル化社会では、日本の存在自体が危うくなります。文部科学省は、企業から原資を集め、「官民協働海外留学支援制度～トビタテ留学 JAPAN 日本代表プログラム」を創設しました。経済が活況を呈していない中でも、寄付金が集まったことに象徴されるように、今や、文部科学省が国内学生の海外派遣数増加推進のための施策を講じるだけでなく、社会も「グローバル人材」には、海外体験が必要であるとして、国内学生の海外派遣への関心は高くなっています。今回の研修は、「国際連携系職員養成プログラム」の「レベル１」として、「海外派遣業務」の基本について学びます。

■主な受講対象

大学等で海外派遣業務に携わっている方。教員、職員を問いません。初心者及び経験年数が短い方はもちろんですが、経験年数の長い方でも、「おさらい」と「情報交換」のために参加ください。

■本プログラムの到達目標

1. 海外体験の意義について説明することができる。
2. 自大学及び政府等が実施する海外派遣制度について説明することができる。
3. 派遣に際しての手続きを説明することができる。
4. 派遣に際しての注意事項を説明することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）15：30～17：30
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

SPODフォーラム2015　ポスターセッション

■概要

本プログラムは今年からの新たな企画です。今回のポスターセッションは募集テーマを2つに分け，分類 A ではSPODフォーラム2015の全体テーマである学習成果の可視化に関する取組を，分類 B ではその他FD／SD一般の取組を発表していただく予定です。

当日は四国地区内外から合計28組の多彩な取組を報告していただき，その中から参加者の投票により優秀ポスター賞を選出します。

なお，本プログラムは見学自由となっておりますので，参加者相互の情報交換や活発な意見交換の場としてご活用ください。

■取組一覧

分類※	タイトル	発表代表者	所属
A	データから考える愛大授業改善	加地　真弥	愛媛大学
A	LMS を使った授業における学習状況の把握について	長谷川　紀幸	横浜国立大学
A	企業が求めるコンピテンシーと学生生活において獲得できるコンピテンシーの比較検討	松本　高志	阿南工業高等専門学校
A	教務が担う学習成果の可視化・証明書記載事項の検討	中村　章二	愛知教育大学
A	数値化によるコンピテンシー育成成果の可視化	渡邉　剛央	関東学園大学
A	比治山型「学修成果の可視化」について～AP 採択事業	斉藤　克幸	比治山大学・短期大学部
A	学修成果可視化への取り組み	内田　竜司	福岡歯科大学
A	ライティングセンターを核とした学習成果の可視化	西浦　真喜子	関西大学
A	芝浦工大のアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化	坂井　直道	芝浦工業大学
A	大阪府立大学における学修成果可視化の取組	高橋　哲也	大阪府立大学
A	人文科学系学士課程教育における学習成果の検証	篠田　雅人	学習院大学
A	タブレットと e ポートフォリオを用いた学習成果の可視化	田中　洋一	仁愛女子短期大学
B	福井県大学間連携で行う TP 作成ワークショップ	杉原　一臣	福井工業大学
B	大学版反転授業 TBL を用いた能動的学習の実践例	濱田　美晴	高知学園短期大学
B	「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門」の取組	久保田　祐歌	徳島大学
B	理工系講義形式授業における教員支援プログラム開発	榊原　暢久	芝浦工業大学
B	スカベンジャー・ハントを用いた新任教育職員研修	橋場　論	福岡大学
B	行動型，参加型アクティブ・ラーニングとFD，SD	馬本　勉	県立広島大学
B	COC事業「地域交流実践演習」の全学的な取り組み	中居　由香	今治明徳短期大学
B	九産大初の FD・SD 非公認組織その名は「キンロク会」	一ノ瀬　大一	九州産業大学
B	教職協働と部署間連携で実現する実践的な人事研修	中村　洋右	関西学院大学
B	大学教育における本質的な問いを中心とする授業設計	中島　英博	名古屋大学
B	非常勤講師を対象とした組織的な FD の取り組み	岸岡　奈津子	追手門学院大学
B	学生に寄り添い、教員と戯れるSDの実践と今後の展開	吉田　尚子	追手門学院大学
B	追手門学院大学のSDC養成への挑戦	村上　泰市郎	追手門学院大学
B	愛知大の職員人材育成－キャリアビジョンシート導入－	近藤　智彦	愛知大学
B	教職員能力開発拠点「愛媛大学」の SD の取組	阿部　光伸	愛媛大学
B	愛媛大学が変わる、地域が変わる。～あいだい COC～	前田　眞	愛媛大学

※A：学習成果の可視化
　B：FD／SD 一般

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月26日（水）17：40～19：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス
※上記の時間以外も，以下の時間帯はポスター展示の見学は自由です。
　8月26日（水）15：30～19：00，8月27日（木）9：15～17：30，8月28日（金）9：15～13：00

ＦＤ

プログラム番号　2701A

橋本メソッドを反転授業でやろう！！

■講師

金西　計英（徳島大学　大学開放実践センター・教授）

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000 年、博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999 年より徳島大学へ。2009 年より徳島大学大学開放実践センター教授。大学における e-Learning の開発、および運用を取り組む。また、高等教育における ICT 活用の授業開発について、実践という観点から取り組む。

■プログラム概要

最近、その効果に対する喧伝から、アクティブラーニングの一種である反転授業に、注目が集まっています。反転授業の中でも授業中に学生との討論を目指す高次型と呼ばれるものがあります。この高次型の反転授業こそ、「橋本メソッド」でおこなうことが可能です。そこで、本プログラムはワークショップ形式で、「橋本メソッド」と反転授業について、実際に体験しながら学ぶことを目指します。まずは、反転授業とは「橋本メソッド」とはということの理解から始めて、簡易な形での「橋本メソッド」を体験してもらう予定です。反転を実施する上で、具体的な授業の手法を体験することで、自らの反転授業へアレンジすることは容易になると思います。なお、「橋本メソッド」とは富山大学の橋本勝先生の開発した大人数向けのアクティブラーニングのことです。

1. 反転授業と橋本メソッドの紹介（ここは講義式）
2. グループを作ろう
3. グループで作業してみよう
4. グループで発表しよう
5. 作業の振り返り

■主な受講対象

教員。特に、グループワークを授業に取り入れたい方が対象ですが、教務系の職員の参加も歓迎します。

■本プログラムの到達目標

1. 反転授業について授業の構成方法等について説明できる。
2. 橋本メソッドについての授業手法等について説明できる。
3. 反転授業を橋本メソッドと組み合わせて実施する手順を説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2701B

プログラムを成功に導くマネジメントとデザイン思考

■講師

丸山　智子（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室特任助教）

東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College, International Educational Development MA 修了。芝浦工業大学にて博士(学術)の学位取得。プロジェクトマネジメント関する教育、コンサル、プログラム開発を提供する民間企業を経て、2013 年 10 月より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・特任助教。専門は、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ、高等教育。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

仲道　雅輝（愛媛大学総合情報メディアセンター教育デザイン室長
兼教育・学生支援機構教育企画室・講師）

1995 年日本福祉大学社会福祉学部卒業。2009 年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了（教授システム学）。1995 年より日本福祉大学事務職員、2011 年から愛媛大学にて FD・SD や学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。eLC 認定 e-Learning Professional。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

職場における仕事の形態として、定常業務に加え、プロジェクトとしてチームで取り組まなければならない機会が益々増えています。プロジェクトは、携わるメンバーの技量やマネジメント力、人間関係などによって良好になったり低迷したりと、さまざまな要因で変化します。そこで、本セミナーでは、まず、基本的なプロジェクトマネジメントの知識体系を理解します。更に、人間主体の発想でイノベーションを起こし、新たな価値を提供することを目的としたデザイン思考を、意識的に適用してプロジェクトを成功させる手法を学びます。

プロジェクトマネジメントは常に業務でも使えるツールであることから、明日からの職場で実際に使えるヒントが得られます！

■主な受講対象

教職員。研究プロジェクト、大学間連携プロジェクト、業務改善プロジェクト、大学改革プロジェクトなど、様々な規模、種類のプロジェクトが存在します。いかなるプロジェクトにも応用できる、基本的なプロジェクトの立ち上げから終結までのマネジメン手法を扱います。
ステークホールダーの思いを反映させながらプロジェクトを成功させたいと思っている皆様、歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. プロジェクトマネジメントとは何かを説明できる。
2. プロジェクトマネジメントの考え方やプロセスを説明できる。
3. デザイン思考をプロジェクトに適用する有用性について説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10:00～12:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2701C

New!!

人材育成のための人事評価
－評価の心構えとその手法－

■講師

阿部　光伸（愛媛大学　教育企画室　講師）

東北大学大学院教育学研究科修了。専門学校での 15 年の教員生活を経て，平成 15 年度から東北文化学園大学に勤務し学生課長，教務部長，学園事務局部長として人事評価を経験。現在，職場内人材育成をテーマにSDを担当。平成 24 年 4 月から現職。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

新名　敏弘（聖カタリナ大学　入試課長）

滋賀大学経済学部を卒業後，小・中学生対象の学習塾の講師として 5 年間勤務。平成 9 年に聖カタリナ女子大学（現：聖カタリナ大学）に入職し，これまでに総務課，入試広報課，就職課での職務を経験。平成 26 年 4 月に再度入試課に配属となり，平成 27 年 4 月から現職。

■プログラム概要

高等教育機関においても人事評価の必要性／重要性が謳われて久しいですが，“人事評価に時間を掛けることが出来ない／公平・納得性のある評価が出来ているか不安／形骸化している”といった悩みを多く聞きます。SPODでは，当初より一般企業とは異なる大学等の人事政策を鑑みて“職員と大学等が共に輝く”を掲げSDを実施展開してきました。今回の人事評価研修も，人材育成の一手法であることを紹介するとともに，それが組織の活性化と個人の成長を促すために有効な手段となりうることを紹介します。

■主な受講対象

課長，課長補佐相当級の職員で，部下・後輩の成長を促そうと考えている方

■本プログラムの到達目標

1. 人事評価の目的・意義・重要性を説明することができる。
2. 面談の進め方を説明することができる。
3. 人材育成につながる人事評価を行うことができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2701D

ルーブリック評価入門　ー考える、つくる、活用するー

■講師

俣野　秀典
（高知大学　地域協働学部／大学教育創造センター　講師）

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015 年より現職。教育評価や教育方法を中心に、FD を含めた“Educational Development”に取り組む。教育プログラム開発部会長（2010 年～）および課題探求実践セミナー分科会長（2012 年～）として課題探求型授業の開発・支援に携わり、SPOD フォーラム 2014 ではシンポジウム「大学人のためのリフレクション事始」の講師を務めている。

■プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点 30 点とする”との例が示されたりしており、「ルーブリックって何？？」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

■主な受講対象

目標に準拠した評価方法を習得したい教員

■本プログラムの到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2701E

大学図書館での学習支援

－限られたスタッフ・予算・時間の中での創り出し方－

■講師

玉岡　兼治（聖カタリナ大学　図書課　課長補佐）
平成 2 年から聖カタリナ女子大学（当時）図書課に勤務。現在は逐次刊行物受入・ILL・図書館利用指導担当。学生の図書館利用指導については、画一的な説明ではなく、学生の実態や理解度に沿い、学生各自が使い方の分かる方策・実践について着任以来取り組んできた。平成 20 年度国立情報学研究所学術情報リテラシー教育担当者研修修了。平成 22～23 年度 SPOD 次世代リーダー養成研修受講（1 期生）平成 24 年 1 月修了。

亀岡　由佳（徳島大学　学務部　図書館企画課　利用支援係）
平成 17 年 10 月　徳島大学に採用、附属図書館の情報サービス係に配属。その後、利用支援係、図書情報係、雑誌情報係を経て、現在は再び利用支援係に所属。講習会の開催や教員との授業連携、図書館で活動する学生団体のサポートなど、主に図書館における学修支援関係業務を担当している。

山本　哲也（四国大学附属図書館　学術情報課　課長）
国立大学附属病院勤務を経て、1991 年から四国女子大学（現：四国大学）附属図書館に勤務し
現職に至る。著作に「岡本韋庵とその時代」や故上野英信氏の筑豊文庫関連等の論文がある。
得意技は「引越し」。

■プログラム概要

大学図書館での学習支援については、平成 22 年に出た「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」でも明文化されていますが、近年の学生の特徴の変化や講義形式の変化ともあいまって、ますますその必要度は高まってきています。しかしその反面、大学図書館でも予算の削減や図書館スタッフの削減で、図書館業務として学習支援にまではなかなか踏み出せない、という現実問題も抱えています。

そのような中で本プログラムでは、まずお互いの大学での問題点を出し合って学習支援を阻んでいる課題を共有しあい、その後こうした克服すべき課題をもとに、それではどのような学習支援のプランができるのか、グループでのワーク形式で実際に作成してみよう、という内容です。図書館というタイトルは付していますが、図書館職員だけでは解決できない課題です。関心のある方であれば広く参加を歓迎いたします。

■主な受講対象

大学図書館の学習支援に関心のある教職員であればどなたでも

■本プログラムの到達目標

1. 自校における大学図書館の学習支援についてそのニーズを説明することができる。
2. 大学図書館の学習支援の方策や先行事例について説明できる。
3. ニーズにあった学習支援のプランを設計することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

■備考

受講決定後、当日の資料・グループ分けの参考のために事前アンケートをお願いします。

ＦＤ

プログラム番号　2701F

New!!

アクティブラーニング－効果的な学習課題のつくり方－

■講師

中井　俊樹（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　教授）

専門は大学教育論、人材育成論。1998 年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007 年に准教授、2015 年より現職。著書に、『大学の教員免許業務 Q&A』（共編著）、『看護現場で使える教育学の理論と技法』（編著）、『大学の IR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員のための教室英語表現 300』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『アジア・オセアニアの高等教育』（分担執筆）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。

■プログラム概要

アクティブラーニングは、現在の大学教育政策の重要なキーワードとなっています。アクティブラーニングは学習の形態が問われるものであり、学習の内容や質を問うものではありません。当たり前ですが、アクティブラーニングを取り入れれば自動的に授業の学習成果が向上するものではありません。

アクティブラーニングを授業に取り入れる際には、学習の質にこだわる必要があります。質の高い学習につながるように学習活動を設計し、実際に質の高い学習になっているのかどうかを確認することが必要になります。とりわけ大事になるのがアクティブラーニングの学習課題のつくり方です。

本研修では、アクティブラーニングの方法を理解した上で、効果的な学習課題のつくり方を身につけることを目指します。

■主な受講対象

アクティブラーニングの実践に関心のある教員

■本プログラムの到達目標

1. アクティブラーニングについて理解し、自分の授業で活用できる手法を選択することができる。
2. 「本質的な問い」という概念を理解し、自分の授業における本質的な問いとは何かを明らかにすることができる。
3. アクティブラーニングの効果的な学習課題をつくることができる。
4. アクティブラーニングに関する多様な考え方や経験を尊重し、参加者間で共に学びあう雰囲気に貢献することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2702A

大学版反転授業 TBL：チーム基盤型学習の手法

■講師

立川　明（高知大学・大学教育創造センター・准教授）

高知大学理学部から教育センターに移籍後，大学教育へのアクティブ・ラーニングの導入実践と効果検証を行っている。その成果は Tips にまとめている。また，学内，SPOD 内，SPOD 外での教員研修にも活かしている。

■プログラム概要

分かり易く説明しているのにどうして成績が上がらないのか？　これ以上どう説明したら分かるのか？　と悩んだことはありませんか？　レクチャーには実は教育効果はありません。TBL（Team-Based Learning）はチームワークを重視し，チーム一丸となって課題に取り組むことで，学修に対するモチベーションを維持し，アウトプットの時間をとることでより教育効果を高める手法です。

研修では，TBL の流れに沿って実際に体験していただきながらすぐに自分の授業に導入できるように学んでいただきます。

TBL は知識を蓄える授業に適しています。教科書またはこれに準ずる資料をお使いの場合はすぐに導入できます。

■主な受講対象

アクティブ・ラーニングを導入したい教員，TBL の問題を作成したい教員，反転授業を導入したい教員，学生の成績を上げたい教員

■本プログラムの到達目標

1. TBL の手順が説明できる。
2. TBL の問題を作ることができる。
3. TBL の効果を説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2702B

New!!

会議を有意義な時間にするためのマネジメント手法

■講師

丸山　智子（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室特任助教）

東京学芸大学教育学部教員養成課程卒業。Columbia University Teachers College, International Educational Development MA 修了。芝浦工業大学にて博士(学術)の学位取得。プロジェクトマネジメント関する教育、コンサル、プログラム開発を提供する民間企業を経て、2013 年 10 月より愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室・特任助教。専門は、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ、高等教育。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

日々、職場において会議が開かれています。終了後、「今日は何のための会議だったのか」「疲労感だけが残った」「時間が無駄だった」、そんな気持ちになるような会議が多いのではないでしょうか。会議に費やした膨大な時間と、その成果について振り返る時間もなく、次の会議が始まっている現状があります。

本研修では、「マネジメントする」という視点から会議のあり方を考えていきます。会議とは何か、といった本質的な問いから始まり、マネジメントのプロセスやファシリテータの役割などについて学びます。基本的な会議マネジメント手法を知っておくことは、様々な種類の会議に応用することが可能です。また、会議中よくある「論点のずれ」はなぜ起こるのか、など参加者同士での議論を取り入れた研修となっています。

会議を有意義な時間にしたい！と考えている皆さま、ぜひ受講して下さい。

■主な受講対象

職員。様々な会議の種類が存在します。この研修では、最終的に成果を出したり、ゴールにたどり着かなければならない会議を対象にした、マネジメント思考と具体的な進行プロセスや実施手法を習得できます。時間だけが無駄に過ぎていく会議を、意義ある、生産性高い時間にしたいと思っている方、歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. 会議のマネジメントプロセスについて説明できる。
2. 会議を進める上で準備すべき事を理解できる。
3. 会議を効果的・効率的に運営するために必要な手法を説明することができる。
4. 会議のまとめ，及び会議後のフォローの注意すべき点を列挙できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2702D

New!!

始めよう！アクティブ・ラーニング
ー協同学習・文章作成の技法編ー

■講師

西本　佳代（香川大学・大学教育基盤センター・講師）

広島大学教育学部第五類教育学系コース卒業、同大学院教育学研究科教育学専攻博士課程前期修了、同研究科教育人間科学専攻博士課程後期退学。平成 20 年より香川大学教育・学生支援機構の特命助教として勤務。山口福祉文化大学（現・至誠館大学）ライフデザイン学部講師を経て、平成 27 年4月より現職。専門は教育社会学。

■プログラム概要

２０１２年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」以降、アクティブ・ラーニングはいずれの大学においても取り組まなければならない内容として認識されるようになったのではないでしょか。このプログラムでは、アクティブ・ラーニングに関する基礎的な知識と共に、その技法の一部をご紹介します。アクティブ・ラーニングと一口に言っても、その内容は広範多岐にわたります。そこで、本プログラムでは、文章作成の技法に焦点を絞り、その技法を体験しながら、ご自身の授業でどのように取り入れることができるか検討していただくことにしました（そのため、ぜひ現在担当されている授業のシラバスをお持ちいただければと考えております）。

なお、文章作成の技法のほか、①話し合いの技法、②教え合いの技法、③問題解決の技法を扱った SPOD 研修プログラムも開講されます（9月 28 日 29 日、於・香川大学）※。アクティブ・ラーニングの技法をさらに学びたい方は、シリーズでの受講をおすすめします。

※加盟校教職員に5月に配付のSPOD研修プログラムガイド2015 P.21，22参照
（プログラムガイドは、SPODホームページにも掲載しています）

■主な受講対象

アクティブ・ラーニングを授業に取り入れようと思っている教員。本プログラムでは、特に文章作成の技法について重点的に扱いますので、その内容に興味を持たれている方の受講をお待ちしています。

■本プログラムの到達目標

1. アクティブ・ラーニングとはどのようなものか、説明することができる。
2. 文章作成の技法を3つ以上挙げて、その手順を説明することができる。
3. 自らの授業に文章作成の技法を導入することができる。

■準備物

担当されている授業のシラバス

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2702E

学習成果の可視化とポートフォリオ

■講師

根本　淳子
（愛媛大学　大学連携 e-Learning 教育支援センター四国愛媛分室准教授）

企業内教育（IT 系教育の研修開発・実施）、岩手県立大学研究員、熊本大学大学院教授システム学専攻助教を経て現職に至る。研究分野は教育設計・評価など。日本教育工学会・ATD（Association for Talent Development）学会員。博士（ソフトウェア情報学）。

■プログラム概要

本プログラムでは、学習者の成果を蓄積する学生向けポートフォリオの有効活用について参加者とのディスカッションを通じて考えていきます。ポートフォリオ作成には様々な学習活動の成果を取り組むことが有用であるので、多くの情報を管理することに役立つｅポートフォリオについても触れます。ポートフォリオ活用のパターンや事例を紹介し、導入や運用への手がかりや課題を整理していく予定です。

■主な受講対象

ポートフォリオ、特にｅポートフォリオの導入に関心がある教員・職員

■本プログラムの到達目標

1. ポートフォリオとは何か、その特徴（利点）を説明できる。
2. ポートフォリオ実践を行う上でのポイントを説明できる。
3. 他者のポートフォリオ実践の特徴について理解し、相似・相違点を列挙できる。
4. ワークショップで活用した知識を自分の実践にどのように取り入れることが可能か説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13:00～15:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2702F

大学の危機管理　ー事例から考えるハラスメントー

■講師

吉田　一惠（愛媛大学　教育学生支援部　部長）

愛媛大学法文学部法学科卒業。愛媛大学広報室長、人事課長を経て平成 26 年 4 月から現職。広報室・人事課での5年6月の間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、労務・人権侵害事案にも対応。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC として引き続き職員の能力開発に取り組んでいる。

倉田　千春（愛媛大学　総務部　ハラスメント防止対策室　ハラスメント防止対策チームリーダー）

愛媛大学教育学部卒業。愛媛大学採用後は、学生部、医学部、理学部等で主に総務系業務及び労務管理事務に携わる。平成 25 年 4 月からハラスメント防止対策チームリーダーとして、相談窓口や裁判対応に係る業務を担当。

■プログラム概要

あなたが、今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

■主な受講対象

全教職員

■本プログラムの到達目標

1. ハラスメントについて，説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2702G

トップリーダーセミナー：学習成果をめぐる国内外の動向
ー学内・国内・国際社会における合意形成のアプローチー

■講師

深堀　聰子
（国立教育政策研究所・高等教育研究部・総括研究官/副部長）

平成 3 年京都大学教育学部卒業、京都大学大学院教育学研究科博士前期課程修了・同後期課程中途退学、平成 12 年コロンビア大学大学院教育学研究科博士課程修了（Ph.D.）。東京大学社会科学研究所助手、京都女子大学短期大学部講師・准教授を経て、平成 20 年より現職。

■プログラム概要

大学教育を通して学生にどのような知識・技能を身に付けさせたいのか。教育目標や達成すべき学習成果の明確化は、体系的な教育課程を提供するための大前提と言えます。しかしながら、自律性と多様性が尊重されてきた大学では、何を教育目標とするのかについての合意を形成すること自体が、学問分野としても大学組織としても容易ではありません。この問題に、諸外国はどのように向き合ってきたのでしょうか。また、日本ではどのような取組が展開されてきたのでしょうか。

本セミナーでは、学習成果をめぐる国内外の動向を整理しながら、教育目標や達成すべき学習成果についての合意を学内・国内・グローバル社会において形成するためのアプローチと課題について検討します。

・欧州のボローニャ・プロセスとチューニング
・米国の学位資格プロフィール（DQP）とチューニング
・中央教育審議会の学士力答申、日本学術会議の分野別参照基準、文部科学省競争的資金制度を利用した取組事例、国立教育政策研究所のテスト問題バンクの取組（OECD-AHELO 後継事業）

■主な受講対象

・学習成果を強調する大学教育改革に不安や疑問をお持ちの教職員。
・教育課程の体系化、学位プログラム、学士力と分野別参照基準、学習成果アセスメントをめぐる国内外の動向に関心をお持ちの教職員。

■本プログラムの到達目標

1. 学習成果をめぐる国内外の動向について、俯瞰的に説明することができる。
2. なぜ教育目標・学習成果を明確化する必要があるのかを説明することができる。
3. 学問分野で共有する抽象的な教育目標の枠組みと、各大学で設定する具体的な学習成果を区別して、それぞれの意義について説明することができる。
4. ご自身の置かれた文脈のなかで、教育目標・学習成果について合意を形成するアプローチを発案し、その課題を想定することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2703H　シンポジウム

学びの成果をどう可視化し、組織的な教学改善を推進するか

■講師

高橋　哲也
（大阪府立大学学長補佐(教育担当)／高等教育推進機構　教授）
京都大学　理学研究科数学専攻修了後，大阪府立大学総合科学部助手、同大学総合教育研究機構教授、副学長（教育担当）等を経て、2013年4月より現職。研究テーマは，IR(Institutional Research)の実践的研究，大学数学教育，局所体上の代数群のスーパーカスピダル表現に関する研究，数学学習支援システムの開発，整数論の暗号理論への応用など。

福島　真司
（山形大学エンロールメント・マネジメント部　教授）
広島大学学校教育研究科言語教育学専攻修士課程，桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了，ビジネス・ブレークスルー大学大学院経営学研究科修士課程修了。山陽女子短期大学助教授，宮崎国際大学助教授，鳥取大学准教授等を経て，2007年7月より現職。専門は教育社会学，日本語学で，研究テーマは，大学マネジメント，大学ガバナンス，大学マーケティング，米国大学の管理・運営方法，大学入学者選抜方法など。

橋本　智也
（京都光華女子大学EM・IR部）
京都外国語大学フランス語学科卒業，大阪市立大学大学院文学研究科前期・後期博士課程修了。NTT コミュニケーション科学基礎研究所での実習生及び東京での企業勤務を経て，2012年4月から現職。大学職員として実務的な視点からIRなどの文献をまとめたサイト『私立大学職員による Institutional Research（IR）文献メモ』を更新中。

司　会　：　小林　直人（愛媛大学学長特別補佐／教育・学生支援機構教育企画室長　教授）

■プログラム概要

近年の高等教育改革の動向として、教員が「何を教えるか」から学生が「何を学び、修得するか」という学習成果への転換、および学習成果の「可視化」と「公表」といった説明責任の遂行が強調されています。

そこで、本シンポジウムでは、「学びの成果をどう可視化し、組織的な教学改善を推進するか」というテーマを設定し、国公私立大学における事例をもとに、学習成果の可視化とデータによる教学改善についての知恵と課題を共有することを目的とします。具体的には、「学生の学習に関するデータをどのように収集・分析しているのか」「学生の学習の成果をどのように可視化しているのか」「学生の学習のデータをどのように組織的な教育改善に活用しているのか（活用していこうと考えているのか）」「学生の学習のデータが組織的な教学改善に有効に活用されるためにはどのような課題があるのか」などの論点を検討することで、参加者の所属する機関の実践に役立つ知見を提供することを試みます。なお，当日は，まず3名のパネリストに実践事例をご報告いただき，その後パネルディスカッション等を行う予定です。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月27日（木）15：30～17：45
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2801A

学びを促進するための学習支援とアカデミック・アドバイジング

■講師

清水　栄子
（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　講師）
安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教を経て、2015 年 4 月より現職。著書に『アカデミック・アドバイジング：その専門性と実践－日本の大学へのアメリカの示唆－』（単著）がある。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

加地　真弥
（愛媛大学　教育・学生支援機構教育企画室　特定研究員）
島根大学大学院教育内容開発専攻修了（教育学）。島根大学教育開発センター、不動産関係の民間会社、島根県の公立高校常勤講師（約 2 年）を経て、2014 年 6 月より、現職。

■プログラム概要

学生たちの学びを促進するために、各大学では授業改善や環境整備などの全学的様々な支援が試みられています。加えて、携わっている教職員による工夫・努力も日々行われているところです。本研修では、学習支援の機能について概説するとともに、参加者の所属大学における課題を共有します。併せて米国において実践されている“アカデミック・アドバイジング”について学習成果や携わる教職員の役割・機能という観点からご紹介します。その後、所属大学の学生を対象とする全学的な学習支援における学習成果設定や実践のための企画を具体的に立てていただきます。自大学の実態に即した具体的提案を一緒に考えてみましょう。

■主な受講対象

学習支援センター等の全学組織で学習支援に携わっているもしくは全学的な学習支援に興味・関心のある教職員等

■本プログラムの到達目標

1. 学習支援の機能について説明することができる。
2. 学習成果を達成するための具体的な学習支援方策を提案することができる。
3. 学習支援実践者として必要とされる知識について説明することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2801B

教育データ解釈法入門:
学びの成果の量的指標を読み解くために

■講師

中山　晃
（愛媛大学　教育・学生支援機構　英語教育センター・准教授、
愛媛大学　英語プロフェッショナル養成コース・コーディネーター）

平成８年８月より約２年半の兵庫県立公立高等学校臨時講師を経て、平成 17 年６月、国際基督教大学にて博士（教育学）の学位取得。平成 21 年度より現職。日本学校心理士会愛媛支部・支部長、大学英語教育学会（JACET）アカデミック＆ティーチング・ポートフォリオ研究会・代表。

■プログラム概要

この講義で扱う教育データ（量的指標）は、①期末試験や英語の検定試験等の結果から得られるテストデータと、②授業満足度や個人の意識を問う質問紙等から得られる調査データ、の2種類とします。講義の前半では、前者と後者に共通する項目として、平均値と標準偏差の関係についての基礎的な理解の他、集合データの平均値と関連するデータとの相関関係から一定の命題を推定する際に潜む危険性（例：生態学的誤謬、選択バイアス）を扱います。講義の後半では、①については、相関関係についての理解を深めるグループワークを、②については因果関係について理解につながるグループワークを、架空のシミュレーションデータ（実際に大学の様々な会議等で扱われている教育データを加工したもの）を用いて行いますので、教育データ読み取りのスキルを、体験を通して習得することができます。

■主な受講対象

教職員。入門レベルの内容を扱いますので、「基礎的な」統計データ（指標）の読み取り方法と、その際の留意点について、興味のある方をみなさん歓迎いたします。特に、IR 関連データを扱う部署に、初めて配属となった職員の方にとっては、様々な指標をどう評価・判断するのかといったことについて考えるよい機会になるかと思います。

■本プログラムの到達目標

1. 平均値と標準偏差の関係について、具体的に説明できる。
2. 量的データ（指標）の解釈に際し、注意点を簡潔に説明することができる。
3. 相関関係と因果関係の相違点について、簡潔に説明することができる。
4. この研修を通して得られたスキルを、参加者自身の職場で報告されている教育データの解釈に活用することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2801C

部下・若手職員の育成　－自ら学び成長する－

■講師

米澤　愼二
（学校法人追手門学院　追手門学院大学理事長・学長室審議役）

高等学校卒業後、国家公務員として香川医科大学，東京医科歯科大学，愛媛大学等で勤務，主に人事系を中心に業務を行ってきた。2014 年 4 月から追手門学院大学で勤務し，「追手門学院大学リーダー養成コース（OLS）」のスタッフとして学生の成長を共有している。また，愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC としても活動している。

■プログラム概要

SPOD では SD の講師養成プログラムや SDC 養成講座を実施している。これは，職員自らが「学び，実践し，教える」といった段階的な成長が可能となる SD プログラムである。

一般的に SD にとって最も大切だと言われているのは自己啓発である。本プログラムでは，自己啓発を促し実践力を重視した SD 講師養成手法を学び，さらに，その手法を用いた職員の育成方法を学ぶ。

■主な受講対象

部下や後輩がいる職員であればどなたでも OK です。

■本プログラムの到達目標

1. 人材育成の 3 原則を説明することができる。
2. SD 講師養成プログラムの内容を説明することができる。
3. SDC 養成講座の内容を説明することができる。
4. 教えることが自己の成長につながることを説明できる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ

プログラム番号　2801D

New!!

グラフィック・シラバスを作ろう！

■講師

宮田　政徳
（徳島大学総合教育センター　教育改革推進部門　准教授）

広島大学大学院 文学研究科修了（英語学）。2001 年 10 月より徳島大学 大学開放実践センター勤務後、2013 年 4 月より徳島大学 教育改革推進センターへ異動。2014 年 4 月より総合教育センターへ異動。徳島大学では、2002 年より全学FD企画・運営を担当。SPOD では、2010 年よりコア校徳島大学FD担当。

■プログラム概要

グラフィック・シラバスは、通常のシラバス（テキスト・シラバス）では表現できない学習内容をフロー・チャートやダイアグラムや樹形図を使って、一枚のマップで示したものです。学生はグラフィック・シラバスを見ることで、テキスト・シラバスでは分からなかった、毎回の授業目標・内容の流れとそれらの関連性を容易に理解し、授業全体の概念をつかむことが出来ます。一方教員にとっては、グラフィック・シラバスを書くことによって、授業全体の構造を視覚的に概念化し、毎回の授業をよりスムースな流れで行うことが出来るようになります。

グラフィック・シラバスは喩えていえば、学部や学科の授業のカリキュラムを視覚的に表した「カリキュラム・マップ」のようなものです。このカリキュラム・マップで授業間の関連性がわかるのと同じように、グラフィック・シラバスでは、毎回の授業が授業全体の中でどの位置にあるのかが分かります。

本ワークショップでは、グラフィック・シラバスの概念、その意義や特徴を解説し、作成の仕方を説明した後、参加者皆さんに自身のグラフィック・シラバスを書き上げて頂きます。そのために参加される方は当日必ずご自分のテキスト・シラバスを一部ご持参下さい。

■主な受講対象

シラバスを改善したい教員。

■本プログラムの到達目標

1. テキスト・シラバスとグラフィック・シラバスの違いを説明できる。
2. グラフィック・シラバスの特徴を説明できる。
3. グラフィック・シラバスを書き上げる。

■準備物

当日必ずご自分のテキスト・シラバスを一部ご持参下さい。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10：00～12：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2801E

New!!

障がい学生への配慮と大学教育の本質

■講師

青野　透（徳島文理大学　総合政策学部　教授）

1988 年 3 月金沢大学教養部助教授、1998 年 4 月法学部教授、2003 年 4 月大学教育開発・支援センター教授、その後学長補佐・評議員・経営協議会委員（2015 年 3 月退職）。この間、広島大学客員教授、名古屋大学客員教授。2009 年 4 月大学教育学会常任理事（至現在）。共著に『高等教育論入門　大学教育のこれから』（ミネルヴァ書房）『一歩進んだ聴覚障害学生支援－組織で支えるー』（生活書院）

■プログラム概要

　最初に、テーマについて考えるための前提となる、法理念、制定法および政策上の知識を整理しながら、講義します。次に、私たちの職場で行われている高等教育は何をめざすものであるのかについて、講師の考えをお話します。さらに、障がい学生支援がその中でどのように位置づけられるべきかについてお話します。

　これらの知識と認識を踏まえた上で、次の二つについて、ペア・ワークから始めるワークを行います。

1. 障がい学生への配慮を自分が行うことが、高等教育機関の教職員であることの自覚につながっていること
2. 障がい学生、支援学生、支援教職員とのつながりの中で、自分が一人の人間として成長しつつあること

ワークの結果を共有し、それが法や政策についての知識とどう関連するかを確認して終了です。

　受講者の予習課題は、1と2のそれぞれについて自己の体験を振り返り、言葉（メモ程度で良いので書き言葉）にしていただくことです。

■主な受講対象

障がい学生に対する支援・配慮が大事であると思いながらも、組織的な取組が行われていないことにもどかしさを感じている教職員

■本プログラムの到達目標

1. 高等教育機関で学ぶことは障がい者にとって人権保障の要であることを説明できる。
2. 障がい学生への配慮が国の政策に基づいて求められていることを説明できる。
3. 障がい学生への配慮は高等教育の本質論に基礎づけられていることを説明できる。
4. 障がい学生への配慮を行うことが高等教育機関の教職員であることの自覚につながっていることについて、体験を交えて語ることができる。
5. 障がい学生、支援学生、支援教職員とのつながりの中で、一人の人間として成長しつつあることについて、体験を交えて語ることができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10:00～12:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

プログラム番号　2801F

New!!

大学組織論－大学はどのような論理で動くのか－

■講師

中井　俊樹（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　教授）

専門は大学教育論、人材育成論。1998 年に名古屋大学高等教育研究センター助手、2007 年に准教授、2015 年より現職。著書に、『大学の教員免許業務 Q&A』（共編著）、『看護現場で使える教育学の理論と技法』（編著）、『大学の IR Q&A』（共編著）、『大学の教務 Q&A』（共編著）、『大学教員のための教室英語表現 300』（編著）、『大学教員準備講座』（共著）、『アジア・オセアニアの高等教育』（分担執筆）、『成長するティップス先生』（共著）などがある。

■プログラム概要

学長が右を向けと言ったら、各学部や教職員は右を向くのでしょうか。右を向かないとしたら、右を向くようになった方がよいのでしょうか。大学という組織は、大学以外の組織と異なるとよく言われます。大学組織は他の組織とどのような点で異なるのでしょうか。

近年の大学改革では、大学のガバナンスのあり方についても議論がなされています。大学のガバナンスを理解することが難しい一つの理由は、法体系に基づく運営体制と歴史的な慣行が異なる場合があるからです。

本セッションでは、大学という組織がどのような論理で動いているのかについて深く理解する機会をつくります。大学組織の論理を理解した上で、実際の組織運営に応用する力を身につけます。さらに、大学のガバナンス改革が大学の組織の論理をどのように変えようとしているのかについても展望します。

■主な受講対象

教職員。大学組織は他の組織とどのような点で異なるのか、個々の教職員はどのような力によって動いているのか、大学の構成員はどのような組織風土を大切にしているのか、大学では誰が実質的に意思決定しているのか、大学ではどのようなリーダーシップが有効なのかなどの疑問を持っている方を歓迎いたします。

■本プログラムの到達目標

1. 大学教員の特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる。
2. 大学の組織的特徴を理解し、自分の言葉でまとめることができる。
3. 大学組織の論理を理解し活用できる枠組みを身につけることができる。
4. 大学組織に関する多様な考え方や経験で培った事例を尊重し、共に学びあう雰囲気に貢献することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）10:00～12:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2802A

テーマ別ラウンドテーブル：映像を活用した授業・研修

■講師

小林　忠資
（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室　特定研究員）

名古屋大学教育学部卒業。
同大学院教育発達科学研究科教育科学専攻満期退学。
2014 年 3 月から名古屋大学高等教育研究センター研究員、2015 年 4 月より現職。

■プログラム概要

映画は、学習者の深い学びを促すことのできる魅力的な「素材」です。すでに授業・研修において映画はさまざまな形で活用されています。しかし、授業・研修での映画の活用方法、活用上の留意点については十分には検討されておらず、「教材」として可能性については十分に検討されていないといえます。本ラウンドテーブルでは、授業・研修での映画の活用方法や映画を活用するうえでの工夫を参加者間で共有し、映画を「教材」として活用するうえでのヒントが得られる機会にしたいと考えています。

途中のディスカッションでは、映画の活用方法ついてのご自身の経験や他で見聞きした実践例等を、参加者の方にそれぞれご紹介いただく予定です。まだ授業・研修での実践例は知らないけど、こんな風に使えるのではないかという案でも構いません。

授業・研修でこれから映画を活用してみたい方、映画の活用方法を知識として知りたいという方の受講も大歓迎です。

■主な受講対象

映画やドキュメンタリーなどの映像を授業・研修で活用しているまたは活用してみたいと考えている教職員

■本プログラムの到達目標

1. 授業・研修における映画の活用方法を三つ以上挙げることができる。
2. 映画を活用した学習活動を、目標に沿って設計することができる。
3. 映画を活用した実践の共有をとおして、さまざまな活用方法を身につける。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＳＤ

プログラム番号　2802B

New!!

ワールド・カフェ　ーSD について語ろうー

■講師

野口　里美（香川大学教育学部総務係長）

昭和 61 年香川大学採用。総務，会計，学務を一通り経験した後，平成 25 年 4 月に現在の部署に配置換え。一昨年度まで FD 関係業務を担当し，SPOD 設立当初からネットワークコア校の FD 担当事務として携わっていた。SPOD 研修プログラムでは，「SPOD－SD プログラム開発セミナー」，「ファシリテーター養成講座」，「FDer 養成講座」を受講。また，外部団体主催の「はじめてのワールド・カフェ」，「ワールド・カフェ・ファシリテーター養成コース」等セミナーに参加し，「SPOD フォーラム 2012」で「ワールド・カフェ」の講師を担当。その他，外部団体主催の「SPT セルフカウンセラー養成講座」を受講し，Coco-iku（心育）協会（一般社団法人 SP コミュニケーション協会）から Coco-iku（心育）インストラクターとして認定を受ける。「SPOD フォーラム 2013」「SPOD フォーラム 2014」で「ツールを使ってコミュニケーション～自己理解と他者理解～」の講師を担当。

■プログラム概要

ここ数年、「ワールド・カフェ」というコミュニケーション手法が、企業や大学の研修、小学校の授業など様々な分野で活用されています。ワールド・カフェは、『知識や知恵は機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話し、自由にネットワークを築くことのできる「カフェ」のような空間でこそ創発される』という考えに基づいた話し合いの手法です。

職場での活用例としては、誰もがリラックスした雰囲気で意見交換や知識の共有ができる対話の場をワールド・カフェで提供し、そこから生まれる新たな発想を部局の枠を越えて取組むプロジェクトに発展させることが可能です。また、教員と職員、そして学生もが一同に会し、大学全体の課題や学生問題について、立場や世代を超えて本音で話し合う場づくりにも有効です。

本プログラムでは、皆さんにワールド・カフェを体験していただき、意識とノウハウを共有しながら、「自分の職場でもやってみたい」と感じてもらえるような価値のある対話の場にしたいと考えています。また、SD について本音で語り合い、今後組織内で SD を進めていく上での一助になればと考えています。どなたでも気軽に安心してご参加ください。

■主な受講対象

1. ワールド・カフェを体験してみたい方
2. コミュニケーションが活発で、関係性の高い組織を作りたいと考えている方
3. SD のあり方について本音で話したい方

■本プログラムの到達目標

1. 「ワールド・カフェ」の手法を理解し、説明することができる。
2. 自身の職場で「ワールド・カフェ」を実践することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2802C

テーマ別ラウンドテーブル：
学生支援の現状と課題－私たちにできることは？－

■講師

清水 栄子
（愛媛大学　教育・学生支援機構　教育企画室　講師）

安田女子大学文学部英語英米文学科卒業。桜美林大学国際学研究科大学アドミニストレーション専攻修士課程修了。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了（博士（教育学））。学校法人安田学園安田女子大学企画室、庶務課、教務課、学生課、公立大学協会事務局主幹、国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教を経て、2015 年 4 月より現職。著書に『アカデミック・アドバイジング：その専門性と実践－日本の大学へのアメリカの示唆－』（単著）がある。愛媛大学教職員能力開発拠点 SDC／SPOD-SDC。

■プログラム概要

学生の学びの促進、そして何よりも豊かな学生生活に向けて、私たち教職員は日々努力しています。しかし、その過程では、様々な課題や疑問を抱えているのではないでしょうか？

本ラウンド・テーブルでは、私たちが日々抱えている課題あるいは問題点等を参加者間で共有し、共に考え、話し合う中で何らかのヒントが得られる機会にしたいと考えています。なお、学生支援と一言で言っても、その対象や範囲は多岐に渡っています。ディスカッションのテーマについては、当日参加の皆さんにお伺いした上で、決定します。ぜひ、フラットな立場で明日の学生たちの学生生活を支援するために、活発な議論にしましょう。どうぞよろしくお願いします。

■主な受講対象

学生支援に携わっているあるいは興味のある教職員

■本プログラムの到達目標

1. 学生支援に関する課題を説明することができる。
2. 実践の共有を通して、自大学での学生支援ができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）13：00～15：00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス

ＦＤ／ＳＤ

New!!

プログラム番号　2802D

テーマ別ラウンドテーブル：
学びの成果をどう可視化するか？

■講師

小林　直人
（愛媛大学　学長特別補佐、教育・学生支援機構　教育企画室長、
愛媛大学　医学部　総合医学教育センター長・教授）

昭和 63 年 3 月東京大学医学部医学科卒、平成 7 年東京大学にて博士（医学）の学位取得。平成 17 年度より愛媛大学医学部教授、平成 21 年度より愛媛大学教育・学生支援機構副機構長と教育企画室長を兼任。平成 27 年度より学長特別補佐。教育担当理事（教育・学生支援機構長）のもと、大学全体のFDをミクロ・レベルからマクロ・レベルまで幅広く担当。

■プログラム概要

中央教育審議会の答申や認証評価等の外部評価では、「学生の学習/学修成果」を評価しその評価に基づいて教育改革を行うことが強く求められています。一方で、教育の成果や学習/学修の成果は定量的に表現することが難しく、評価結果をどうやって可視化すれば良いのか、という問いに対する明瞭な答えは未だ提示されていないようです。

今回のSPODフォーラムでは、『学生の学びの成果の可視化』をメインテーマとして、シンポジウムを含めて、3日間に開講される様々な講習においてこのテーマを扱います。このラウンフドテーブルでは、フォーラムの締めくくりとして参加者自らが何を学んだかを振り返り、お互いの情報共有と意見交換を通じて理解を深めます。そして、参加者が自大学へ持ち帰ることのできる“お土産”を作ることを目指します。

なお、振り返りを中心としたラウンドテーブルというこの研修形態自体が、あるべき授業のメタファーにもなっています。

■主な受講対象

今回のSPODフォーラムに参加された教職員の方であれば、どなたでも。学生の学びをどうやって可視化できるのかについて、さらなる情報収集や意見交換を行いたい方。

■本プログラムの到達目標

1. 高等教育において学生の学びを可視化する方法を、列挙できる。
2. 自大学の特徴、強みと弱みを分析した上で、自大学において学生の学びを可視化する方法を提言できる。
3. 今回のSPODフォーラムでの自分自身の学びを、言語化することができる。

■日時・会場

日　　時　：　平成27年8月28日（金）13:00～15:00
会　　場　：　愛媛大学　城北キャンパス